



# コンサイスの紙

## 五木寛之

一九四五年の夏、私たち一家は現在の北朝鮮のピョンヤン（平壤）で敗戦を迎えた。父の仕事の関係で、各地を転々として暮らしていたのだが、その頃は当時の平壤師範学校の公舎に住んでいたのだ。

やがてソ連軍が進駐してくると、私たちが住んでいた公舎も接収されることになった。やってきたソ連兵たちが、しきりと何かを要求するのだが、ロシア語なので意味がわからない。

そのうち通訳がやってきて、「彼らは紙が欲しいのです」という。

「紙って、どういう紙ですか」  
さっぱり意味がわからずに戸惑っている。

「これです。この紙です」

と、雑囊ざつうから一冊の小型の本をとりだした。見るとコンサイス型の英和辞典である。中の紙が引きちぎられて、半分ほどの厚さになっていた。

「辞書が欲しいんですか」

と、不思議に思ってたがねえ。

「ロシア語の辞書はありませんけど」

「いや、このコンサイスの紙が必要なんです」

よく意味がわからないままに、父の書棚にあった一冊の小型の辞書を探してきて手渡した。

「ちがう。こういう紙じゃない」

通訳氏は手に持ったコンサイスの紙を示して、

「インディアン紙とかいうんですかね、この極薄の紙が欲しいんですよ」

当時、中学一年生だった私は、古いコンサイス型の英和辞書を一冊もっていた。当時は英語は敵性言語といわれて、ろくな授業もなかったのだが、先輩が入学のときにお祝いとしてプレゼントしてくれた古い小型の辞書を大事にとっておいてあったのである。それ

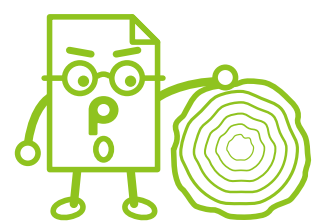
「ハラショー！」  
と、ソ連兵は大喜びである。すぐにそのコンサイスの一ページをピリッと破って、何やらポケットから取り出すと、それを指先で器用に巻いて口にくわえた。  
マッチをすって火をつける。ふかぶかと吸い込んで白い煙をはく。ほっとした表情だった。  
なるほど、手巻きの煙草なのか、と、その時になってやっと事態が納得できた。手巻き煙草をつくるには、極薄のこんな用紙が最適なのだろう。  
一服吸って、彼は私に吸いさしの煙草をさし出し、人の好きそうな笑顔で何か言った。  
「一服、どうだい」  
と、すすめてくれたのだろう。私は手を振って断りながら、紙にもいろんな用途があるもんだなあ、と考えた。十三歳の夏だった。



いつき・ひろゆき●作家。1932年、福岡県生まれ。早稲田大学文学部ロシア文学科中退。1966年、『さらばモスクワ愚連隊』で小説現代新人賞受賞の後、「蒼ざめた馬を見よ」で第56回直木賞、『青春の門』で第10回吉川英治文学賞を受賞。著作に『風に吹かれて』『朱鷺の墓』『戒厳令の夜』『蓮如』『大河の一滴』『他力』『親鸞』（全6巻）など多数。

### ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

**無駄なく使うこと、得意です。**  
古紙のリサイクルだけじゃない。建築用の木材をつくるときに出た残りの部分や古い木材、曲がった木など、木材として使い道が少ないものも紙づくりには利用できる。そうやって、資源を無駄なく大切にしながら、紙はつくられているんです。



- 有効利用している主な木材**
- 製材残材** 建築用の木材をつくるときに出た残りの部分
  - 低質材** 細い木、曲がった木など、製材には使えない木材
  - 間伐材** 森を育てる過程の手入れとして間引かれた木材

紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、  
「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。 <http://kamitsubu.com/>